

## スペンサーからウィルソンへ

氏名：横山輝雄

所属：南山大学人文学部

ダーウィンは『種の起源』では人間についてほとんど全く言及しなかった。しかし、その後の著作では人間についても論ずるようになり、とりわけ『人間の由来』では、人間社会の進歩や停滞の問題、あるいは道徳性(利他行動)などの問題を議論している。しかし、人間社会の「進歩＝進化」についてははるかに多くのことを語り、また影響が大きかったのはスペンサーの「社会進化論」である。人類学者モーガンの『古代社会』などもその枠組みにそっている。

しかし、20世紀に入るとスペンサーの社会進化論はさまざまな批判を受けることになった。文化人類学における「文化相対主義」などがその一つであるが、人間の社会や文化に生物学的な説明を持ち込むことは避けられるようになり、1940年代の進化総合説の成立、つまり「第二次ダーウィン革命」以降、生物学あるいは自然科学において進化論を確立した偉大な科学者ダーウィンに対して、それをいかげんな議論で人間や社会に越権的に拡張したスペンサーは二流の人物とされ、その著作も読まれなくなってしまった。このことは、ダーウィンの進化論を生物学の内部に限定し、人間社会はそれと関係なしに人文社会科学が扱う棲み分けをもたらすことになった。

そうした状況が変化したのは、ウィルソンの『社会生物学』以降である。この本はそのタイトルが「社会進化論」を連想させることもあり、グールドなどから批判されることになった。ウィルソンはそれをいわば確信犯としてやっているのであり、それまでの進化論と人文社会科学の分離と相互不干渉の事態に意義を申したてたのである。その意味では、スペンサーの時代に回帰しているといえよう。

しかし、スペンサーの時代と現在では、確かに似た問題や議論が一方ではあるものの、単に新しい経験的事実が増えただけではない重要な理論的違いもある。スペンサーの時代にはダーウィンの進化論も現在のように理解されておらず、「進化＝進歩」とする歴史法則主義的な進化論理解であり、自然選択説を中核とする現在の進化論理解とは違っていた。自然選択説の同時発見者ウォーレスは人間の精神を進化論の対象から除外し、またハクスレーは人間の倫理は進化と逆方向とするなど、生物進化論のレベルでは当時最もダーウィンの進化論を理解していたはずの人々も現在とは大きくちがっていた。また、人類学では文化伝播の単位をどう設定するかという議論もあった。そうしたものは、その後一世紀にわたる科学の進展でどう克服されたのか、あるいはそうではないのか。その問題を検討することは、現代の「文化進化」をめぐる議論についても示唆するところ少なくないであろう。